般若心経

―「色即是空 空即是色」の存在論 ―

宮下英明　著

Ver. 2018-08-10

文中の青色文字列は，ウェブページへのリンクであることを示しています。

般若心経
——「色即是空 空即是色」の存在論

本書について

本書は，

http://m-ac.jp/

のサイトで書き下ろしている『般若心経 —「色即是空 空即是色」の存在論』を PDF 文書の形に改めたものです。

目次

はじめに …… 1

1.「色即是空 空即是色」は，物理 …… 5
　1.1 「色即是空 空即是色」は，存在階層論 …… 6
　1.2 「不生不滅」の物理 …… 11

2.「色即是空 空即是色」を読むには ,「言語レベル」の考えが必要 …… 13

3.「般若心経」テクスト …… 19
　3.1　漢訳 (玄奘訳) …… 20
　3.2　サンスクリット原本和訳 (中村元・紀野一義訳) …… 26

4.「般若心経」の訳・註 …… 39

おわりに …… 49

本文イラスト，ページレイアウト，表紙デザイン：著者

はじめに

わたしは先日，わたしの存在論の到達点として，『「系ー個」存在論』を作成した。その中で，この存在論の類型になるものの一つとして，「空観 (くうがん)」を取り上げた。

しかしその記述は，全体との釣り合いから，どうしてもひじょうに要約した内容のものになる。そこで，「空観」について少し丁寧な論が必要であるという思いから，本テクストを作成することにした。

本テクストは , 2010 年 3 月に「空観」の存在論の押さえとして『般若心経』の表題で つくったテクストに，今回新たにつぎの二つを加えるものである：

「はじめに」
「「色即是空 空即是色」は , 物理」

併せて，表題につぎに副題をつける：

「「色即是空 空即是色」の存在論」

わたしは，若いときから，存在論は『般若心経』の「色即是空 空即是色」がいちばんよいと思ってきた。
実際，物理学が示す「存在のマクロ・ミクロ階層構造」と，これは合致する。

わたしは無宗教の者なので，わたしにとっての『般若心経』のテクストは，「菩薩」云々の記述を除いたところのつぎのものである：

色不異空　空不異色	色は空に異ならず、空は色に異ならず。
色即是空　空即是色	色は即ちこれ空、空はこれ即ち色なり。
受想行識　亦復如是	受想行識もまたまたかくのごとし。
是諸法　空相	この諸法は空相にして、
不生不滅	生ぜず、滅せず、
不垢不浄	垢つかず、浄からず、
不増不減	増さず、減ぜず、
是故	この故に、
空中	空の中には、
無色	色もなく、
無受想行識	受も想も行も識もなく、
無眼耳鼻舌身意	眼も耳も鼻も舌も身も意もなく、
無色聲香味觸法	色も声も香も味も触も法もなし。
無眼界　乃至　無意識界	眼界もなく、乃至、意識界もなし。
無無明　亦　無無明盡	無明もなく、また、
	無明の尽くることもなし。
乃至	乃至、
無老死　亦　無老死盡	老も死もなく、また、
	老と死の尽くることもなし。
無苦集滅道	苦も集も滅も道もなく、
無智　亦　無得	智もなく、また、得もなし。

これは，存在論であり，「空観 (くうがん)」と呼ばれる。
わたしはこれをさらに，物理の論に見なす。
そして「存在のマクロ・ミクロ階層構造」がその物理というわけである。

→『「系ー個」存在論』

1.「色即是空 空即是色」は，物理

1.1 「色即是空 空即是色」は，存在階層論

1.2 「不生不滅」の物理

1.1 「色即是空 空即是色」は，存在階層論

「色即是空 空即是色」の読み方は，つぎのようになる：

「色即是空」:「色は，空を含意する」
「空即是色」:「空は，色の必要条件」

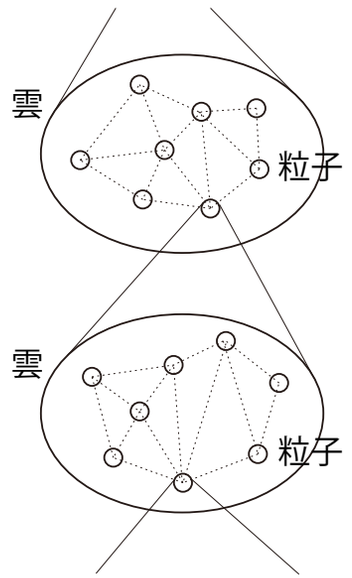
「色即是空」の「即是」は, 形式論理で謂う「含意 (implication)」である。
一方，「空即是色」の「即是」の方は，そうではない。
即ち,「空即是色」は,「色即是空」とは別のことを言っているのではない。
「色即是空」を「空即是色」の言い方で繰り返しているのである。
実際,「空即是色 色即是空」とはならない (「色即是空」と「「空即是色」の順序はひっくり返せない) わけである。

「空」とは，実体がないということである。
「色即是空 空即是色」は，事物 (存在) を非実体とする存在論である。

この存在論は，「空観 (くうがん)」と呼ばれる。

＜非実体＞は，観念論ではない。
物理学が明らかにする「存在のマクロ･ミクロ階層性」は，事物 (存在) を非実体として示すものである：

雲は，水の粒 (個) がつくる雲 (系) である。
水の粒は，水の分子 (個) がつくる雲 (系) である。
存在は「雲 (系ー個)」の構造をとる。



そして，「空性」の＜非実体＞は，この「存在のマクロ・ミクロ階層性」の＜非実体＞と同じものである。

こうして，「色即是空 空即是色」のテクストはつぎのように読まれるものである：

色不異空　空不異色	現象は，空性である。
色即是空　空即是色	それが空性であるからこそ， 人間にとって，現象が立つ。
受想行識　亦復如是	受想行識は，空性である。 それが空性であるからこそ， 人間にとって，受想行識が立つ。
是諸法　空相	事物は，空性である。
不生不滅	空性であるから， もとより生も滅も立たない。 （人間が，「生・滅」を立てる。）
不垢不浄	空性であるから， もとより垢も浄も立たない。 （人間が，「垢・浄」を立てる。）
不増不減	空性であるから， もとより増も減も立たない。 （人間が，「増・減」を立てる。）
是故	こういうわけで、
空中	存在の空性に拠り、
無色	「現象」というものは，ない。 （人間が，「現象」を立てる。）
無受想行識	「受想行識」というものは，ない。 （人間が，「受想行識」を立てる。）

無眼耳鼻舌身意	「眼耳鼻舌身意」というものは，ない。 （人間が，「眼耳鼻舌身意」を立てる。）
無色聲香味觸法	「色聲香味觸法」というものは，ない。 （人間が，「色聲香味觸法」を立てる。）
無眼界　乃至　無意識界	「眼界」というものは，ない。 「意識界」というものは，ない。 （人間が，「眼界」「意識界」を立てる。）
無無明　亦　無無明盡	「無明」という位相は，ない。 またその逆のことになる 「無明がなくなる」という位相も，ない。 （人間が，「無明」「無明がなくなる」を立てる。）
乃至	あわせて，
無老死　亦　無老死盡	「老死」という位相は，ない。 またその逆のことになる 「老死がなくなる」という位相も，ない。 （人間が，「老死」「老死がなくなる」を立てる。）
無苦集滅道	「苦集滅道」という位相は，ない。 （人間が，「苦集滅道」を立てる。）
無智　亦　無得	「智」という位相は，ない。 また「得」という位相も，ない。 （人間が，「智」「得」を立てる。）

よくよく留意すべきは，ここには何ら宗教も観念論（形而上学）もないということである。

空観は，つぎのように説くところの存在論である：

「存在論は，人間の視点・スケールで事物を解釈するから，
実体論になる。
人間の視点・スケールを相対化すれば，実体は無くなる。」

そして物理学が，人間の視点・スケールが相対化される形を，「存在のマクロ・ミクロ階層構造」として示してきたというわけである。

1.2 「不生不滅」の物理

生物進化学のテクストには，「系統樹」の絵が載っている。
この絵に対し，ひとはこれを生物の「進化」の絵のように思ってしまう。
しかし，「系統樹」は，現前の生物の先祖溯行を表現したものである。
ここには，絶滅した種が描かれていない。
実際，絶滅した種は無数にあったわけであるから，これの表現など思いもよらない。

生き物の生滅の「無数」は，想像できない「無数」である。
一瞬の時にも，想像できない「無数」の生き物が生じまた滅している。

生き物の生滅は，《積み木で建物をつくり，そして壊す》みたいなものである。
積み木の数は限られていても，＜つくって壊す＞の回数は無限である。

そしてこれが，「不生不滅」の読み方になる。
「不生不滅」は，

「生き物の生滅は，《積み木で建物をつくり，そして壊す》みたいなもの――＜物質＞の存在階層での生滅は無い」

と解釈することで，科学になる。

2.「色即是空 空即是色」を読むには，「言語レベル」の考えが必要

「般若心経」では，存在・世界が，「有って無い・無くて有る」の言い回しで論じられる。 この「有って無い・無くて有る」の言い回しをすんなり読めないと,「般若心経」の読解はおかしな方向に進んでしまう。すなわち，無用に形而上学的になったり，神秘主義に進んだりする。

「有って無い・無くて有る」は，不思議なこと・理解しがたいことを言っているのではない。 比較的単純なことを言っている。
そしてこの論述のしくみの理解には,「言語レベル」の考えが必要になる。

＜有る＞とは，言語主体（認知主体）が「有る」と言っている，ということである。 ＜有る＞は，言語主体に依存している。 そこで，この言語主体（Ｓとする）を，相対化したり，無くしてみる。 そうすると，＜有る＞は無くなる。――＜有る＞は無い。

> 例えば, 認知主体として深海の小動物とか草木を考え, そして「*この場合，ひとが存在・世界を思念するときに用いる枠組のどれほどが，保てるだろうか？*」と自問してみる。 この自問で「ほとんど保てなくなる」を答えとする者は，存在・世界が認知主体依存であることを認める者ということになる。

「無い」といま言ったのはわたしであるが, このわたしは言語主体である。ただし，「有る」を言うＳについて語る言語主体である。
ここで, Ｓが言う「有る」の属する言語（Ｌとする）と, わたしが言う「無い」の属する言語は, 異なるレベルにあるととらえる。 すなわち, 後者を, 言語Ｌのメタ言語ととらえる。 これが，「般若心経」を読むときの要点である。

「般若心経」に出てくる「有って無い・無くて有る」の言い回しは，このような具合に，二つの言語レベルをまたいでいる。 具体的にことばを拾っていくと，つぎのようになる：

言語Ｌ	Ｌのメタ言語
五蘊	「五蘊」皆空
色	「色」不異空 空不異「色」 「色」即是空 空即是「色」
受想行識	「受想行識」亦復如是
法	是諸「法」空相
生滅	不「生」不「滅」
垢浄	不「垢」不「浄」
増減	不「増」不「減」
色	無「色」
受想行識	無「受想行識」
眼耳鼻舌身意	無「眼耳鼻舌身意」
色聲香味觸法	無「色聲香味觸法」
眼界・意識界	無「眼界」乃至無「意識界」
無明・無明盡	無「無明」亦無「無明盡」
老死・老死盡	無「老死」亦無「老死盡」

苦集滅道	無「苦集滅道」
智・得	無「智」亦無「得」

思想としての「般若心経」は，ここまでである。
すなわち，これより先は＜宗教＞（＜悟り＞を神秘化する心的行動）の領域になる。

「般若心経」は，二つの言語レベルでなるこの言語運用が身についている状態ないしその境地を「般若」(智慧）と定め, これを「波羅蜜多」(修行) のゴールとする。
なぜ，これがゴールか？
「有る」を言う主体の相対化により＜有る＞が無くなることで，つぎのようになるからだ，と言う：

心無圭礙　→　無有恐怖
遠離一切顛倒夢想
究竟涅槃
得阿耨多羅三藐三菩提

＜有る＞が無いものになるから，こだわりがなくなり (「無圭礙」),「まあこんなもんだ」の達観に至る。
「阿耨多羅三藐三菩提」とは「悟り」のことであるが，「悟り」とは何かすごいこと・神秘的なことを謂っているのではなく，この達観のことである。

但し宗教としては，この「悟り」を，すごいこと・神秘的なことにして

いくことになる：

般若波羅蜜多　是大神咒　是大明咒　是無上咒　是無等等咒
能除一切苦
真實不虚

3.「般若心経」テクスト

1.1　漢訳 (玄奘訳)

1.2　サンスクリット原本和訳
(中村元・紀野一義訳)

3.1　漢訳 (玄奘訳)

ここに,『般若心経』の全文を載せる：

摩訶般若波羅蜜多心経

観自在菩薩	観自在菩薩	くわんじざいぼさつ
行　深般若波羅蜜多　時	深般若波羅蜜多を行じし時、	ぎやうじんはんにやはらみつたじ
照見　五蘊皆空	五蘊皆空なりと照見して、	せうけんごうんかいくう
度　一切苦厄	一切の苦厄を度したまえり。	どいちさいくやく
舎利子	舎利子、	しやりし
色不異空　空不異色	色は空に異ならず、空は色に異ならず。	しきふいくう　くうふいしき
色即是空　空即是色	色は即ちこれ空、空はこれ即ち色なり。	しきそくぜくう　くうそくぜしき
受想行識　亦復如是	受想行識もまたまたかくのごとし。	じゆさうぎやうしき　やくぶによぜ
舎利子	舎利子、	しやりし
是諸法　空相	この諸法は空相にして、	ぜしよほふくうさう
不生不滅	生ぜず、滅せず、	ふしやうふめつ
不垢不浄	垢つかず、浄からず、	ふくふじやう
不増不減	増さず、減ぜず、	ふぞうふげん
是故	この故に、	ぜこ
空中	空の中には、	くうちう
無色	色もなく、	むしき
無受想行識	受も想も行も識もなく、	むじゆさうぎやうしき

無眼耳鼻舌身意	眼も耳も鼻も舌も身も意もなく、	むげんにびぜつしんい
無色聲香味觸法	色も声も香も味も触も法もなし。	むしきしやうかうみそくほふ
無眼界　乃至　無意識界	眼界もなく、乃至、意識界もなし。	むげんかい　ないし　むいしきかい
無無明　亦　無無明盡	無明もなく、また、無明の尽くることもなし。	むむみやう　やく　むむみやうじん
乃至	乃至、	ないし
無老死　亦　無老死盡	老も死もなく、また、老と死の尽くることもなし。	むらうし　やく　むらうしじん
無苦集滅道	苦も集も滅も道もなく、	むくしふめつだう
無智　亦　無得	智もなく、また、得もなし。	むち　やく　むとく
以　無所得　故	得る所なきを以ての故に、	いむしよとくこ
菩提薩埵	菩提薩埵は、	ぼだいさつた
依　般若波羅蜜多　故	般若波羅蜜多に依るが故に	ゑはんにやはらみつたこ
心　無圭礙	心に圭礙なし。	しんむけげ
無圭礙　故	圭礙なきが故に、	むけげこ
無有恐怖	恐怖あることなく、	むうくふ
遠離　一切　顛倒夢想	一切の顛倒夢想を遠離し	をんりいちさいてんたうむさう
究竟涅槃	涅槃を究竟す。	くきやうねはん
三世諸仏	三世諸佛も	さんせしよぶつ
依　般若波羅蜜多　故	般若波羅蜜多に依るが故に、	ゑはんにやはらみつたこ
得　阿耨多羅三藐三菩提	阿耨多羅三藐三菩提を得たまえり。	とくあのくたらさんみやくさんぼだい
故　知	故に知るべし、	こち
般若波羅蜜多	般若波羅蜜多は	はんにやはらみつた
是　大神咒	これ大神咒なり。	ぜだいじんしゆ
是　大明咒	これ大明咒なり。	ぜだいみやうしゆ

是　無上咒	これ無上咒なり。	ぜむじやうしゆ
是　無等等咒	これ無等等咒なり。	ぜむとうどうしゆ
能除　一切苦	よく一切の苦を除き、	のうぢよいちさいく
真實　不虚	真実にして虚ならず。	しんじつふこ
故　説　般若波羅蜜多咒	故に般若波羅蜜多の咒を説く。	こせつはんにやはらみつたしゆ
即　説咒　曰	すなわち咒を説いて曰わく、	そくせつしゆわち
羯諦　羯諦　波羅羯諦	羯諦 羯諦 波羅羯諦	ぎやてい　ぎやてい　はらぎやてい
波羅僧羯諦	波羅僧羯諦	はらそうぎやてい
菩提薩婆訶	菩提娑婆訶	ぼじそはか
般若心経	般若心經	はんにやしんぎやう

3.2 サンスクリット原本和訳 (中村元・紀野一義訳)

中村元・紀野一義 [訳註]『般若心経・金剛般若経』, 岩波書店 , 1960. pp.189-196. に載っている原文と訳文を, 対訳表の形に編集：

namas sarvajñāya.	(全知者である覚った人に礼したてまつる)
evam mayā śrutam.	このようにわたしは聞いた。
ekasmin samaye bhagavān Rājagrhe viharati sma Grdhrakute parvate mahatā bhiksusamghena sārdham mahatā ca bodhisattvasamghena.	あるとき世尊は、多くの修行僧、多くの求道者とともにラージャグリハ (王舎城) のグリドゥフラクー山 (霊鷲山) に在した。
tena khalu samayena bhagavān Gambhlrāvasambodham nāma samādhim samāpannah.	そのときに世尊は、深遠なさとりと名づけられる瞑想に入られた。
tena ca samayenāryāvalokitesvaro bodhisattvo mahāsattvo gambhlrāyām prajināpāramitāyām caryām caramāna evam vyavalokayati sma.	そのとき、すぐれた人、求道者･聖アヴァローキテーシュヴァラは、深遠な智慧の完成を実践しつつあったときに、見きわめた、――存在するものには五つの構成要素がある――と。
pamca skamdhās tāmś ca svabhāvaśunyān vyavalokayati.	しかも、かれは、これらの構成要素が、その本性からいうと、実体のないものであると見抜いたのであった。
athāyusmāñ Chāriputro buddhānubhāvenāryāvalo kiteśvaram bodhisattvam etad avocat.	そのとき、シャーリプトラ長老は、仏の力を承けて、求道者･聖アヴァローキテーシュヴァラにこのように言った。

yah kaścit kulaputro gambhlrāyām prajñāpāramitāyām caryām cartukāmah katham śiksitavyah.

「もしも誰か或る立派な若者が深遠な智慧の完成を実践したいと願ったときには、どのように学んだらよいであろうか」と。

evam ukta āryāvalokiteśvaro bodhisattvo mahāsattva āyusmamtam Śariputram etad avocat.

こう言われたときに、求道者・聖アヴァローキテーシュヴァラは長老シャーリプトラに次のように言った。

yah kaścic Chāriputra kulaputro vā kuladuhitā vā gambhlrāyām prajñā-pāramitāyām caryām cartukāmas tenaivam vyavalokayitavyam.

「シャーリプトラよ、もしも立派な若者や立派な娘が、深遠な智慧の完成を実践したいと願ったときには、次のように見きわめるべきである――《存在するものには五つの構成要素がある。》と。

pamca skamdhās tāmś ca svabhāvaśunyān samanupaśyati sma.

そこでかれは、これらの構成要素が、その本性からいうと、実体のないものであると見抜いたのであった。

rupam śunyatā
śunyataiva rupam.

物質的現象には実体がないのであり、
実体がないからこそ、物質的現象で (あり得るので) ある。

rupān na prthak śunyatā
śunyatāyā na prthag rupam.

実体がないといっても、それは物質的現象を離れてはいない。
また、物質的現象は、実体がないことを離れて物質的現象であるのではない。

yad rupam sā śunyatā
yā śunyatā tad rupam.

このようにして)、およそ物質的現象というものは、すべて実体がないことである。
およそ実体がないということは、すべて物質的現象なのであ

evam vedanāsamjñā-samskāra-vijñānāni ca
śunyatā.

evam Śāriputra sarvadharmā śunyātalaksanā
anutpannā
aniruddhā
amalavimalā
anunā
asampurnāh.

tasmāt tarhi Śāriputra śunyatāyām
na ruparp
na vedanā
na samjñā
na samskārā
na vijñānam.

na caksur
na śrotram
na ghrānam
na jihvā

る。

これと同じように、感覚も、表象も、意志も、知識も、すべて実体がないのである。

シャーリプトラよ、この世においては、すべての存在するものには実体がないという特性がある。
生じたということもなく、
滅したということもなく、
汚れたものでもなく、
汚れを離れたものでもなく、
減るということもなく、
増すということもない。

それゆえに、シャーリプトラよ、実体がないという立場においては、
物質的現象もなく、
感覚もなく、
表象もなく、
意志もなく、
知識もない。

眼もなく、
耳もなく、
鼻もなく、
舌もなく、

na kāyo	身体もなく、
na mano	心もなく、
na rupam	かたちもなく、
na śabdo	声もなく、
na gamdho	香りもなく、
na raso	味もなく、
na sprastavyam	触れられる対象もなく、
na dharmālh.	心の対象もない。
na caksurdhātur yāvan	眼の領域もなく、乃至、
na manodhātur	意識の領域もなく、
na dharmadhātur	心の対象の領域もなく、
na manovijñānadhātuh.	意識の識別の領域もない。
na vidyā	さとりもなければ、
nāvidyā	迷いもなく、
na ksayo yāvan	さとりがなくなることもなければ、迷いがなくなることもな
na jarāmaranam	い。
na jarāmaranaksayah.	かくて、老いも死もなく、
	老いと死がなくなることもないというにいたるのである。
na duhkhasamudaya-nirodhamārgā	苦しみも、苦しみの原因も、苦しみをなくすことも、苦しみ
na jñānam	をなくす道もない。
na prāptir	知ることもなく、
nāprāptilh.	得るところもない。
	得ないということもない。

tasmāc Chāriputra aprāptitvena bodhisattvānām prajñāpāramitām āśritya viharaty acittāvaranah

それ故に、シャーリプトラよ、得るということがないから、求道者の智慧の完成に安んじて、人は、心を覆われることなく住している。

cittāvarananāstitvad atrasto viparyāsātikrāmto nisthanirvānah.

心を覆うものがないから、恐れがなく、顛倒した心を遠く離れて、永遠の平安に入っているのである。

tryadhvavyavasthitā sarvabuddhāh prajñāpāramitām āśrityānuttarām samyak-sambodhim abhisambuddhāh.

過去、現在、未来の三世にいます目ざめた人々は、すべて、智慧の完成に安んじて、この上ない正しい目ざめを覚り得られた。

tasmāj jñātavyah prajñāpāramitāmahāmamtro mahāvidyāmamtro 'nuttaramamtro 'samasamamamtrah sarvaduhkhapraśamana-mamtrah satyam amithyatvāt prajñāpāramitāyām ukto mamtrah, tadyathā,

それゆえに人は知るべきである。
智慧の完成の大いなる真言、大いなるさとりの真言、無上の真言、無比の真言は、すべての苦しみを鎮める真言であり、偽りがないから真実であると。
その真言は、智慧の完成において次のように説かれた。

gate gate pāragate pārasamg ate bodhi svāhā,

往ける者よ、往ける者よ、彼岸に往ける者よ、彼岸に全く往ける者よ、さとりよ、幸あれ。

evam Śāriputra gambhlrāyām prajñāpāramitāyām caryāyām śiksitavyam bodhisattvena.

シャーリプトラよ、深遠な智慧の完成を実践するときには、求道者はこのように学ぶべきである」――と。

atha khalu bhagavan tasmat samadher vyutthayaryavalokiteśvarasya bodhisattvasya

そのとき、世尊は、かの瞑想より起きて、求道者・聖アヴァローキテーシュヴァラに賛意を表された。

sadhukaram adat.

sadhu sadhu kulaputra evam etat kulaputra.

「その通りだ、その通りだ、立派な若者よ、まさにその通りだ、立派な若者よ。

evam etad gambhlrāyām prajñāpāramitāyām caryām cartavyam, yathā tvayā nirdistam anumodyate tathāgatair arhadbhih.

深い智慧の完成を実践するときには、そのように行われなければならないのだ。
あなたによって説かれたその通りに目ざめた人々・尊敬さるべき人々は喜び受け入れるであろう。」と。

idam avocad bhagavān.

世尊はよろこびに満ちた心でこのように言われた。

ānamdamana ayusman Chāriputra āryāvalokiteśvaraś ca bodhisattvah sā ca sarvāvatl parsat sadevamānusāsuragamdharvaś ca loko bhagavato bhāsitam abhyanamdann iti

長老シャーリプトラ、求道者・聖アヴァローキテーシュヴァラ、一切の会衆、および神々や人間やアスラやガンダルヴァたちを含む世界のものたちは、世尊の言葉に歓喜したのであった。

prajñāpāramitāhrdayasutram samāptam.

ここに、智慧の完成の心という経典を終る。

4.「般若心経」の訳・註

以下に，「般若心経」のわたしの読解を示す。
この読解は，つぎの訳・註を参考にしている：

『般若心経・金剛般若経』, 中村元・紀野一義 訳註，岩波文庫

観自在菩薩	かの全知の求道者が	菩薩：求道者
行　深般若波羅蜜多　時	智慧探求の修行をしていたとき	般若：求道のゴール概念となる智慧 波羅蜜多：ゴールに至ること（「此岸から彼岸へ」）
照見　五蘊皆空	ひとは存在 / 世界を思念するとき「五蘊」を枠組にしているが これには実体が無い，という認識に至り、	五蘊：色受想行識
度　一切苦厄	「苦厄」がどういうことかを看取して，一切の「苦厄」から脱けた。	
＜思想＞としての「般若心経」はここからであり，これより前は＜宗教＞になる		
舎利子	舎利子よ	舎利子：「般若心経」は，舎利子という名の人物に 語る体裁になっている。
色不異空　空不異色 色即是空　空即是色	「五蘊」のうちの先ず「色」，すなわちひとが「存在・現象」 と考えているものには，実体が無い。 「存在・現象」には実体が無く，そして，実体が無いという ことが「存在・現象」であるということなのだ。	
受想行識　亦復如是	「五蘊」の残りの「受想行識」――「感受する・想う・行う・識る」 ――も，これと同様である。	

舎利子	舎利子よ	

是諸法　空相	ひとが「物事」としている諸々には，実体が無い。	
不生不滅	ひとは「生・滅」を実体のように考えるが，これに実体は無い。	
不垢不浄	「垢・浄」も，実体が無い。	垢・浄：きたない・きれい
不増不減	「増・減」も，実体が無い。	
是故	こういうわけで	
空中	実体が無いということにおいて	くうちう
無色	「存在・現象」というものは，存在しない。	
無受想行識	「感受する・想う・行う・識る」というものは，存在しない。	
無眼耳鼻舌身意	「眼耳鼻舌身意」は，ひとが存在 / 世界を思念するときの枠組を構成するものになっているが，こういうものは存在しない。	身：触ることで意識対象をつくるところの体 意：心 (いま流に言えば，脳)
無色聲香味觸法	「眼耳鼻舌身意」に対応する形で同じく枠組を構成している「色聲香味觸法」，こういうものは存在しない。	色聲香味觸法：眼耳鼻舌身意がそれぞれつくる意識対象の領域
無眼界　乃至　無意識界	「眼界」というものは，存在しない。 「意識界」というものは，存在しない。	眼界：眼に見えることで存在・世界となるもの 意識界：思考にのることで存在・世界となるもの
無無明　亦　無無明盡	ひとは「無明」すなわち「迷い」を実体があるもののように考えるが，こういうものは，存在しない。 求道の到達する境地として「迷いが無くなる」をひとは求めたりするが，「迷いが無くなる」という位相は，存在しない。	
乃至	そして	
無老死　亦　無老死盡	ひとは「老死」を実体があるもののように考えるが，こういうものは，存在しない。	

	求道の到達する境地として「老死が無くなる」をひとは求めたりするが，「老死が無くなる」という位相は，存在しない。	
無苦集滅道	ひとは「苦」から抜ける方法を求め，「苦集滅道」という枠組を立ててこの方法を考えようとするが，「苦集滅道」というものは，存在しない。	苦集：苦をとらえるための分析と総合の方法 滅：苦を脱けることの定義 道：苦を脱ける実践方法
無智　亦　無得	ひとはゴールとなる智慧を想い，これを得ようとしていろいろ修行を考えたりするが，そのような智慧はもともと存在しない。道理として，これを得るということも無い。	
＜思想＞としての「般若心経」はここまでであり，これより先は＜宗教＞になる		
以　無所得　故	得るということがそもそも無いので	
菩提薩垂	求道者は	菩提薩垂 (菩薩)：求道者
依　般若波羅蜜多　故	般若波羅蜜多に依ることで	
心　無圭礙	心をなにかにとらわれることがない。	圭礙：心をとらわれる
無圭礙　故	心をとらわれるということがないので	
無有恐怖	恐れがなく	
遠離　一切　顛倒夢想	俗人がやるような顛倒した考え方からは遠く離れ	
究竟涅槃	超脱の境地に入る。	涅槃：超脱の境地
三世諸仏	過去・現在・未来の仏は	三世：過去・現在・未来
依　般若波羅蜜多　故	般若波羅蜜多に依ることで	
得　阿耨多羅三藐三菩提	完全な悟りを得る。	阿耨多羅三藐三菩提：仏の悟りとしての「完全な悟り」

故　知	故に知るべし、	
般若波羅蜜多	般若波羅蜜多は	
是　大神咒 是　大明咒 是　無上咒 是　無等等咒	これ大神咒なり。 これ大明咒なり。 これ無上咒なり。 これ無等等咒なり。	
能除　一切苦 真實　不虚	よく一切の苦を除き、 真実にして虚ならず。	
故　説　般若波羅蜜多咒	故に般若波羅蜜多の咒を説く。	
即　説咒　曰	すなわち咒を説いて曰わく、	
羯諦　羯諦　波羅羯諦 波羅僧羯諦　菩提薩婆訶	羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶	
般若心経	般若心經	

おわりに

『般若心経』の「色即是空 空即是色」は，存在論である。
本論考の目的は，これをさらに「物理」にすることであった。
実際，無宗教の立場では，これが 『般若心経』に思想的意義・価値を見る形である。

参考文献

本論考が論じた『般若心経』は, つぎの書の解説になる『般若心経』である:

『般若心経・金剛般若経』, 中村元・紀野一義 訳註, 岩波文庫

本論考の目的は『般若心経』の存在論を画定/確定することであり, この目的においては, 参考文献はこの書一つでまったく足りる。この書そのものが, 主要な文献にあたった上に成り立っているものだからである。

註：本論考は，つぎのサイトで継続される (これの進行に応じて本書を適宜更新する)：

http://m-ac.jp/thought/hannyashingyo/

宮 下 英 明（みやした ひであき）

1949 年，北海道生まれ。東京教育大学理学部数学科卒業。筑波大学博士課程数学研究科単位取得満期退学。理学修士。金沢大学教育学部助教授を経て，現在，北海道教育大学教育学部教授。数学教育が専門。

般若心経――「色即是空 空即是色」の存在論

2014-10-23　初版アップロード (サーバー：m-ac.jp)
2018-08-10　更新

著者・サーバ運営者　宮下英明

サーバ　m-ac.jp

http://m-ac.jp/
m@m-ac.jp